
闘走本能

津軽 あまに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闘走本能

【Nコード】

N9846N

【作者名】

津軽 あまに

【あらすじ】

走ることしかできない生命。「怪物」と呼ばれた彼女。

少年が、彼女との疾走の果てに、ほんの少しだけ成長をする話。

乱暴にシーツを引き剥がし揺り起こす。

彼女はわずかに身じろぎをして、唸り声をあげた。

——なんだ、へっぽこの方か。

低血圧な彼女。目覚め際は機嫌が悪い。

おまけに、起こしに来たのが恋人でないことが不満らしい。

——で、なんだよ。まさか、話をしに来たってわけでもないんだらう？

決まっている。彼女はある一つの目的のために全てを磨き上げたシンプルな生命だ。

ならば、それを起こした自分の目的は一つ。

——アタシと走るっていうのか、へっぽこ。アイツじゃなく、弟の、オマエが。

無言で、彼女の肌に触れる。手のひらから、どくり、と脈動が伝わる。

力強い鼓動。弾ける前の静かな力動。

彼女の身体の動きが、まどろみの身じろぎから、生存意義を前にした震えへと変わる。

——へえ。オマエ風情が、アタシについてこれると思ったのかい？

熱を持った皮膚がぱちりと指を弾く。

侮られるのは問題じゃない。けれど、これは、儀式だ。

乗り越えなければ前に進めない、刺さったままの棘を抜くための
通過儀礼。

その手を引いて、動き出す。

—— なんだよ、へっばこ。街には繰り出さないのか？

さすがにそれは無理な注文だ。僕が彼女と走っているのを人に見
られたら大問題だ。

—— ま、テメェん家の庭は十分走り甲斐があるからいいけどさ。
ヤマ

空に掲げられた二本の輝き。

鼓動はなお強く。縮められた気が、弾ける寸前まで高められる。

「怪物」の名を冠した、鋼鉄の少女。

世の中の多くからアウトローと認識される彼女の、その純粹さを
知っている。

今、熱を帯びたその脈動は、どこまでも疾走を求めている。

ついてこれるか。その背中から伝わる鳴動が問う。

ついてこれるさ。その手を強く掴んで答えを返す。

爆ぜた。加速した世界に漂白された意識。

走り出した、と理解するまでに刹那。

鞭をいれ、認識を疾走に同調。

疾い。必死で握った手に力を込める。叩きつける風に、吹き飛ば
されそうになる。

揺れる身体を押さえつけ、彼女の動きに意識を向ける。

連動する全身の部位。ただ一つ速度を生み出すためだけに動く明快な機能。

それは疾走というより、世界に対する抵抗じみた執念を持つ。鈍過ぎる物理法則への挑戦。

地を蹴り風を切り捨て雲を割り空を越え第二宇宙速度を超えて星すら飛び出さんと。

闘走。そう、彼女の恋人である「あの人」は表現した。

二人が疾駆する姿。剥き出しの本能。速度への欲求。血生臭い艶。その、泥じみた美しさに憧れた。

——別の女のこと、考えてた^{ヤッ}だろ。

急勾配を軽やかに駆け抜けながら、彼女は笑った。

身体が揺れる。ああ。やっぱり、「あの人」のようにはいかない。不恰好で。不器用で。不安定で。

ぐらぐらと揺れながら彼女に追いつがる姿は、今の僕の象徴だ。眼前に、彼女と一体になった「あの人」が浮かぶ。

一面の大きな背中。一分の揺れもなく、一対たるはただ前を征く人騎。

——知ってるよ。オマエが好きなのは、アタシじゃない。

アタシに乗ってるアイツの背中に追いつきたいだけなのさ。

ああ、そうだ。

届かないことを知りながら手を伸ばすその残像。

風の壁が頬を叩く。腕を、脚を、大気が押し潰さんと迫る。

無駄だ。ここから先は、おまえの器では辿り着けない領域だと。知ったことか。

決めたのだ。

ちっぽけな意思で。へっぽけな決意で。たっぷりの債権を返せる

ほど、強くなると。

しがみつく。格好など知らない。
不恰好で。不器用で。不安定で。

それがどうした。

身を飾る理由はないから不恰好でいい。
身を庇う理屈はないから不器用でいい。
身を守る理性はないから不安定でいい。
ただ。その疾さに、全身でしがみつく。

木々の緑蓋が後方へ飛んでいく。

疾く。疾く。1秒前の自分よりも疾く。
緑が消え。視界を埋め尽くす青。

高められた速度は浮遊感さえ錯覚させ、飛行の幻想を認識に刻み
付ける。

飛べる。飛べる。5秒後の自分なら飛べる。

身をぎりぎりまで倒す。傾斜した世界。視界に近づく地面。

叫ぶ大気。圧倒的な摩擦に、彼女の脚が悲鳴を上げる。

だが。耳を支配するのはそれ以上の歓声。

孤独な速度に酔う人騎の本能。世界との闘走。「あの人」の見て
いた世界。

—— ああ。何だ。

手を伸ばす。

いつの間にか、目の前に迫っていた「あの人」の背中に。
その指が——

—— アイツなしでも飛べるんじゃないか、テメエは。

その回廊を越えたところで、彼女は立ち止まった。
急勾配の中、山裾に沿って作られたこの道は、何度通っても飛行を思わせる。

いや、イメージだけではない。一秒判断を過てば、事実空に命を散らすのは確実だ。

「あの人」の後ろで守られて、幾度も通ってきた世界。

「あの人」を喪って、随分と遠ざかっていた世界。

それを今日は、一人で越えていく。

別に達成感はない。ただの始まり。一つの終わり。

家を出る。行く先は彼女を生み出した、匠の街。

目の前の海も、空も、人も全く異なる世界。

それを明日は、一人で越えていけないのだから。

「五年経ったら、今度は街を走ろうか」

—— オムツがとれたら付き合ってやるよ、へっぽこ。

ハンドルから伝わる圧力。

「あの人」の彼女の重みが、ずしりと細い腕を苛めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9846n/>

闘走本能

2010年10月12日03時47分発行